

老年学 (Gerontology) の源流 (I)

橘 覚 勝

1

Gerontology (わが国では老年学と訳すことに一応協議決定された) という言葉が, Geriatrics (老年医学または老年病学とすでに訳されている) に対してとなえだされたのは, 筆者の知るかぎり, 1944アメリカにおいて Gerontological Society が結成せられ, その機関誌として Journal of Gerontology が1946年に発刊せられたところからだとおもう。Geriatrics という語は, 1909年に I. L. Nasher が New York Medical Journal にはじめて用いたもので, その後まもなく1916年に彼は Geriatrics という大著を公刊し, さらに1919年に M. W. Thewlis が同じく “Geriatrics, A Treatise on Senile Conditions, Diseases of Advanced Life and Care of the Aged” を物した頃からとなえだされたといつてよかろう。後1946(第5版) に Thewlis はそれを全面的に改訂増補し, 書名も “The Care of the Aged—Geriatrics” と改題し, その第2部において Geratology¹ という語を用いた。もちろんこれは “the science of the phenomena of decadence” と注釈せられ, さらにその内の第5章を hygiene の問題として, それに対して Gerocomia² という語があてられた。すなわち Gerocomia は hygiene of advanced life という意味なのである。

すでに15世紀 (1489年) にイタリアの Gabriele Zerbi が Gerontocomica³ という言葉を持ちいて, ラテン語で, “Gerontocomica Scilicet de Senum Cura atque Victu” (Gerontocomica, Concerning the Care of the Aged and the Way of Living—筆者の英訳) という著述を公にし, 老年期の一般の衛生について多くの示唆をあたえたといわれ, その後さらにイギリスの J. Floyer は1724年に “Medicina Gerocomica,⁴ or the Galenic Art of Preserving Old Men's Health” をかいて, 老年の衛生とその健康保持に関する Galen の説を紹介したのである。ここにいう Gerontocomica または Gerocomica は Thewlis のいう Gerocomia の古語ではないかと考えられる。ともあれ以上のように Gerontology または Geriatrics に類似の用語が古くからとなえられていたのである。

ここで筆者はひとまず語源的に考察して, Gerontology, Geratology, Geriatrics という語の意味を詮索してみよう。geron, geras などのギリシャ語の転用であるが, geron は old man, geras は old age という意味をもつことは周知のことであろう。かかる接頭語を冠した語につい

老年学 (Gerontology) の源流 (I)

て、Oxford Dictionary⁵を点検すると、前掲のThewlisの用語であるGeratologyはすでに1884年頃に廃語になっているというから、Thewlisによって再び復活されたことになる。その意味は氏のいう如く“The science of the phenomena of decadence”とあり、特に“a species of animals approaching extinction”におけると注釈をつけ加えている。さらに同辞書にはGerocomy, Gerontic, Gerontocracy, Gerusiaなどの語が記載せられている。Gerocomyとは“The science of the treatment of the aged”とあって、1818年ごろにすでに廃語、Geronticという語は1885年ごろまで old age, senile という意味をになって用いられたもの、Gerontocracyとは Government by old men の意味であり、かかる政治組織をもったのがスパルタのGerusiaであったのであろう。しかし前者は1830年、後者は1838年頃に廃語となっているとある。かくみればGeratologyにしる、近來のGerontologyにしる、かかる接頭語をもって老年または老人を意味する語は、ギリシャ語のgeras, geronを語源として、ラテン語そして英語に転化しはしたが、19世紀前半に一応廃棄せられ、最近にいたって再び復活したと考えられる。

如上の考察を一応手引きとして、老年学の源流について文化史的乃至は歴史的に解明したいと思うのであるが、さしあたり近來の老年学の研究領域について検討する必要があると考える。これについてE. J. Stieglitz⁶, N. W. Shock⁷およびC. Tibbitts⁸の所見をあげてみよう。

E. J. Stieglitz

- (1) 老年期の生物学的研究
- (2) 老年医学
- (3) 老人の社会的、経済的および文化的諸問題

N. W. Shock

- (1) 高年層人口の増加にともなう生ずる社会的、経済的諸問題
- (2) 個人的乃至は集団の反応にあらわれる老化過程の心理学的考察
- (3) 老化の生理学的基礎ならびに病理学的変化
- (4) 老化の一般生物学的研究

C. Tibbitts

- (1) 生物学的老化の問題
- (2) 心理学的老化の問題
- (3) 社会生活事象の変化の問題
- (4) 老化の社会心理学的乃至は行動的側面

というように、老年学の研究領域については、三者大同小異ということが出来る。かくして以上のような流れにそって、その源流を探求せねばならないであろう。

注

- (1) M. W. Thewlis, The Care of the Aged (Geriatrics) 第5版, 1946のPart 2がGeratologyという題になっている。

老年学 (Gerontology) の源流 (I)

- (2) 同上 Chapter VがHygiene (Gerocomia) となっている。
- (3) J. T. Freeman, *Medical Perspectives in Aging, The Gerontologist—Perspectives in Aging*, Vol. 5, No.1, Part II 1965 p.14参照
- (4) 同上 p.19参照
- (5) *Shorter Oxford English Dictionary*, 1933, 788—789
- (6) E. J. Stieglitz, *Geriatrics, Journ. of Gerontology*, 1946, Vol.1, No.2 153—164
- (7) N. W. Shock, *Trends in Gerontology*, 1957, p.1
- (8) C. Tibbitts (ed), *Handbook of Social Gerontology*, 1960, Part Iの第1章 Origin, Scope, and Fields of Social Gerontology (by C. Tibbitts). 3—26, p.7のFour Aspects of Aging 参照

2

哲学史の語るところによれば、古代ギリシャにおける学問すなわち哲学にしる、医学にしる、数学その他の自然科学にしる、それらは11世紀乃至12世紀以後、アラビアを通じて西ヨーロッパに伝播したというから、そのあたりを臨界線としてその前後の考察がまずおこなわれるべきであろう。Gerontology に関する生物学的乃至は医学的見解も、その後西欧にわたってはじめて経験科学として発達したとみなすことができ、それ以前にさかのぼれば、医学といえども形而上的乃至は神秘的な色彩を脱脚しえなかったのもあって、従って科学としての Gerontology というよりも、むしろ当時の社会あるいはその代表的思想家が、old age またはagingをいかに観想したかという以上にはでなかったのではないかといえる。そしてそれは科学としての Gerontology とはおおよそ縁遠いものであったにちがいない。

旧約によれば、古代ヘブライ民族においては、老人または老年に対しては絶大な敬意を表したものであった。旧約出埃及記 (Exodus) に父または母を呪詛したものは死をもってつぐなうべしとあり、また Mose の十誡のなかには “汝は神の国に長命せんがためには父や母をうやまえ” とある。なるほどまた Abraham から Mose にいたるあいだに輩出した英雄および予言者の多くは、みな高寿を得た知恵者であった。その極致として白髪老人の姿で神は表象せられたという。従ってあらゆる訓誡はつねにかかる白髪老人の面前でおこなわれ、老人の面貌を絶賛したものであった。Psalms (詩篇) 中にかかげられた頌詩は、その後たえず老人礼賛の文学に引用せられ、当時のユダヤ人やキリスト教信者に対して、多大の影響をあたえたといわれる。現代のユダヤ人の家庭においても、とくに伝統的且つ保守的な家庭にあっては、老父の権威とそれに対する尊敬は大なるものがあり、祖父母にあっては、その権威は父の場合ほどないにしてもつねに保証されているという。¹

“70年の歳月をかさね、さらに体力あれば80才の老人ともなろう。しかも体力がつづき仕事さえあれば、老年に対する悲痛は消失するであろう”

とはPsalmsにある老年の頌詩である。旧約外典には

老年学 (Gerontology) の源流 (I)

“老年の痲疾病患はよく忍耐してたえしのぶこと、老人を輕蔑し苦惱させてはならぬ²”。
といましているが、これはEcclesiastes (伝道書) に表現せられた老年に対する pessimistic
な見解に対応するものであろう。

ここで想起するのはわが国上古の神話的世界観としての “とこよ、(常世) の観念であり³、
それにつらなる常世神あるいは常世人の表象である。自然児としての上代日本人の観念は、現
世を否定せずしてしかもより高い完全な世界への憧憬をもっていたにちがいない。古代人にと
っては、常世は空想とはいえ現実性のゆたかな世界であった。遙遠の空間に展開する永久不変
の世界として、あるいは豊穡沃土、富と齡とに充滿した光明世界として、さらに道教的な神仙
思想に薰化せられて、不死常樂の世界、恋愛の無何憂郷として観想せられたのであった。

従っていうところの常世神は折口博士⁴の考証にもあるように、純粹の神でもなければまた普
通の人間でもなく、それら兩者を媒介する超自然的な力をもった一種の精靈としてみとめられ
るのであって、その常世神は常世人といってもよいのではないか。要するに常世人といえば、
常世の国から到来する寿命の長い人という意味となり、それが神の世界と人間の世界とを媒介
する一種の精靈として畏敬せられたのであろう。また同博士は “おきな、 “おうな、は古代の
老若制度に関する社会組織において、邑国の宿老の上位にあつて、呪術をおこない神事の主要
部に参加したものとごとき考察しているが、まさに上述のように精靈としての常世人の人間の
性格を示す言葉としてうけとることができる。ここには詳述はさけたいが、後世の翁猿樂さら
に能樂における翁の演出⁵は、まさしくこの常世神または常世人の表象展開と考えられる。

古代ギリシャにおいては、全体として老年に対しては陰惨な見解をいただき、むしろ青年期を
高調したようである。しかし例外的に Sparta では政治上の特別機関として元老院 (Gerusia)
が設置せられ、それは28人の60才以上の長老によって組織せられた。そして青年は自己を犠牲
にして長老に奉仕したのである。近代の歴史家のなかには、スパルタのかかる寡頭偏狭な政治
を非難する人もあつて、頑迷な長老がご意見番として政治を監視すること、そして国家がある
種の半信半疑の統治者組織に結びついていることは、支那における祖先崇拜、三老父老尊重と
ひとしく、歴史上最大の不幸であり、大禍であると評している。

後ホーマー時代にいたつて、老人の地位は一敗地にまみれ、国王あるいは長老は体力、能力
が消失すれば、ただちに若い強力な青年たちに擯斥せられたということである。なお老人に対
してギリシャ人が一般に好感をもたなかったということは、当時の劇作家、思索家、哲学者の
言葉にもよくあらわれているところで、たとえばSophoclesは

“人間の最後の運命は、社会性のかけた、交友のない、気力の乏しいにらしい老年なの
だ。そこにはあらゆる悪という悪がすくっている”。

と老人悪のみじめさを語り、Aristophanes⁸は青年の老人に対する処遇を難じながらも、その著
“Wasps” のなかで老人の口から

“私の尊敬される唯一の機会、は、法律家としての活動力を保持することである”。

老年学 (Gerontology) の源流 (I)

といわしめ、またHesiodos⁹は

“青年ははたらけ、成人は相談相手になれ、そして老人はしづかに祈りをささげよ”

と、老人のさみしきをつけるのである。さらに Socrates, Platon, Aristoteles らの説くところも、老人に対して好意をしめすものではなかった。Socrates¹⁰ (470—399B.C.) のてん綿たる思索は

“完全に理想的な老年期に到達した人は、完全に eroticism を truth への情熱のなかにとかしこんだ人である”

との結論にみちびくこととなり、Platon¹¹ (427—347B.C.) は“Republic”のなかで、

“老人は過去のはなやかなりし生活とおおらかな特権を失って、いとも快々としてたのしまない”。

と、そぞろに老いの悲痛を語り、また Aristoteles¹² (384—322B.C.) もその著“Rhetoric”に老人の性格を次のようにつたえているが、けだし陰うつな面ばかりである。

“老人たちは長年生きてきた。そしてしばしばまやかしの犠牲になった。

彼らはずねに自分の思うことを卒直に表現することをためらう。*と思う、とか*恐らく、
というような言葉をつけくわえる。

彼らは意志の弱さのために不善を不善と断じえない。

彼らは強い愛憎感をもちあわせていない。ただ偏見によってうごくだけである。

彼らの愛憎はながつづきがしない。今日のアはただちに明日の憎しみに、また憎しみは愛にかわる。

彼らの心のもち方は、おおらかとも寛大ともいえない。

彼らは臆病者であり、杞憂家である。

彼らはわがままで便乗的である。

彼らは厚顔無恥、容姿に無頓着である。

彼らは希望にというよりもむしろ記憶に生きる。

彼らは官能的な刺戟をもとめようとはせず、もっぱら自己関心によって生きている”。

かくしてギリシャ人は全体として老年に対して陰惨な見解をいだいたものであった。彼らは青年をこよなくたえ、凋落の老年に対する青春の意気を称揚した。Socratesは70才にしてその運命に随順して、しづかに服毒しておれたのであるが、結局古代ギリシャ人の来世の観念は、人生の悲痛な終幕を克服するには、あまりに脆弱であったのであろう。趣きはいささか異なっているが、老年に対する不興と憎悪を随所に描きだした清少納言の枕草子¹³をおもいだすのである。けだし古代ギリシャ文化とわが国の平安文化とを照合するとき、その華麗絢爛さにおいて一脈相通するものがあるやに考えられる。

老年に対する態度、いわば老年観は、老年そのものの本質や、その時代の社会生活乃至は家庭生活の形式様相から由来することはいうまでもないが、同時に過去の影響、現在の老人の特

老年学 (Gerontology) の源流 (I)

権さらには将来の期待にまつわるものにかかわることはみのがすべからざるところである。従って古代ギリシャにおける医学や生物学の領域での老化についての考察は、当時の一般的思索を背景としておこなわれたものにちがいない。はたして当時の名医学者として頭角をあらわした Hippocrates (460—370B.C.¹⁴) も、生命に関する形而上学的神秘論に影響されながら、医学的考察をそれから離脱させようと努力したことであろう。しかしなお彼の体液的気質説は、運命的な決定論以上にはでなかったといえる。Hippocrates は老年期の特質は、生涯を通じての生来の熱量すなわち生活力の貯蔵が漸減することによって生ずる。しかもその減少は一般に老生体における病気が証明するという。そして彼は老人の病気として次のようなものをあげているのである。すなわち、呼吸困難 (dyspnea)、気管支カタル、排尿困難 (dysuria)、関節痛、めまい (vertigo)、悪液質 (cachexia)、掻痒症 (pruritus)、不眠症、粘液分泌 (眼、鼻)、白内障、緑内障、視力や聴力の鈍摩、腎炎、卒中などである。ただ彼が老人は不快不満もなく断食にたえることができると指摘したことについて、その後その点について長期にわたって物議論争をかましたということである。

生命の根源をもとめた Aristoteles が当時の哲学者であると同時に、偉大な生物学者であるといわれる所以は、半面この Hippocrates に負うところ大なるものがあつたともいわれている。この Hippocrates のいうところを発展させたのは、いわゆるギリシャ第 3 期の Galen¹⁵ (紀元前 2 世紀頃) であった。Galen にとっては、老化または老年は人間のもって生れた宿命的な特性であり、生命の必然的連続的な過程であった。そしてこの観想はルネッサンスの頃まで一般的に確信せられたのである。彼の周辺に Aristoteles 的な友人をもたなかった彼は、まことに幸運といわねばならないのであって、もしそうでなかったならば、彼以後の “一千年間の医学的見解” はおそらく変貌していたにちがいないという人さえある。

古代ローマの Cicero の有名な論文 “Cato Major, or De Senectute” (老年について) (44B. C.) にかかれた “老年の能力、芸劫そして満足を擁護せよ、” という言葉は、ラテン古語でかかれた永久にそして近世においてもなお最も人口に膾炙せられたものの一つであらう。Cicero は能弁の Cato の口をかりて語らせたのであるが、その会話であれモノログであれ、その口から語られたところは、老年を彼らローマ人が共通にもつ重荷とみることに躊躇しなかったのではあるが、人生の時期にともなる老年の陰惨な悲観的なイメージをもつことに対しては否定的であった。事実 Cicero 自身もいろいろな人生の興味や仕事のうちに、その満足をかちえようとするような心身を訓練する機会をみだしたのであった。そして彼は能力の上下をとわず、訓練と適応によって、人間の知的能力は老年にまで保存しうることを確信した。それは歴史から、Cato 自身の個人的な知識や観察から、老令に対する次にかかげるような不利な告訴を知ったからであった。

- (1) 活動的生活からの逃避
- (2) 身体力の弱化

老年学 (Gerontology) の源流 (I)

(3) 官能的快樂の剝奪

(4) 死の接近の自覚と氣力や希望の破滅

そしてCatoはモノローグのかたちでさらに語るのである。すなわち老年に関心のある多くの青年に接触して、¹⁶「自分はいまからギリシャ語の勉強をはじめののだが、実は精神的な支えのないものにとっては老年は退窟なものだ。われわれは老年は成人ののちに、成人は青年につづいて、そして青年は児童ののちに忍びよるものだと考えてはならぬ。それぞれの時期は、それぞれ異ったそしてそれ自身の人生の興味があるものだ。あたかも春は花、秋はみのりという風に。神に服従して争わぬことこそ賢者である、と語っている。かかるモノローグは、人生の享樂をつくして孤独におちいったもの、さらに名声と尊敬をかちえた高貴な老年についての多くの実例からでたものであったという。

以上の考察によって、Catoの口からもれでた言葉を通して、古代ローマ人が老化や老年をいかに観想したかについて、その片鱗を窺知することができるであろう。老年に対する不利な告誡からみれば、当時のローマ人にとっては、老化は勿論歓迎すべきものではなかったであろうが、Ciceroはできうる限り、それらを擁護し弁明しようとしたことがわかる。彼は若い世代に対して老年の生活を知らせたかったのである。われわれは勿論その原著に接したわけではなく、後世の考証によったものであるが、それを考察し詮索しながら、兼好の徒然草¹⁷の老年観を連想した。古代ギリシャの老年観があたかも枕草子のそれと比肩しうべきものとすれば、古代ローマの老年観をもって徒然草の老年観に匹敵させることは、偶然とはいえ興味の多いことだと思う。兼好は「命長ければ恥多し、と向老長命を否定することによって、老人に同情的な好意を示して、老人に対する理想的イメージを髣髴させた。一はキリスト教的、他は仏教的な道德観があったのであろう。ともに宗教的な道義観にささえられている点では共通性をみだすことができる。

注

- (1) S. Hall, *Senescence*, 1922, p.52
- (2) 大間知千代氏の「ヘブライズムとジェロントロジー、(とくに旧約聖書を通して見たもの)による。第4回日本老年学会に発表された講演で、日本老年医学会雑誌(総会講演抄録集)(Vol.2, No.4, 1965) p.299に記載されたもの。
- (3) 拙著 老年期研究(大阪大学文学部紀要Ⅶ 昭和33年3月) p.73
- (4) 拙著 同上 pp.73
- (5) 拙著 同上 pp.74—75
- (6) 守屋美都雄 父老 東洋史研究 第14巻 第1, 2号抜刷
- (7)–(12) 拙著 老年期研究(同上) pp.67—68
- (13) 拙著 同上 pp.81—83
- (14) J.T.Freeman, *Medical Perspectives in Aging*, *The Gerontologist—Perspectives in Aging*, Vol.5, No.1, Part I, 1965, p.3 及びM.W. Thewlis, *The Care of the Aged*, 1946, p.17
- (15) J.T. Freeman, *op. cit.* p.3

(16) S.Hall, *Senescence*, 1922, pp.67-70

(17) 拙著 老年期研究 (同上) pp.84-86

3

ルネッサンス (Renaissance) 以前, いわゆる西洋中世における老年または老化に関する研究の資料としては, **Arnoldus de Villanova**と **Roger Bacon**の業績をあげれば充分であろう。いずれにしても, 中世の思想はキリスト教中心の神学を主軸として, アリストテレスの注釈ということで, きわめて迷蒙混沌たる状態はさけがたく, 東ローマ帝国の滅亡とともに, キリスト教的僧堂思想 (Christian Monasticism), スコラ哲学思想 (Scholasticism) といろいろな道標をたてたのであった。その間にあってギリシャ哲学をはじめ, 医学, 数学, 星学などの自然科学は, すでにアラビアを経由して西欧につたわるという有様であった。かかる消息については後述にゆずるとして, まず上記二者の業績について簡単に考察することとしよう。

Arnoldus de Villanova¹ (1235-1311) はスペイン人ではあるが, アラビア科学の粋とすることができる。ナポリで医学を勉強し, **Montpellier, Barcelona, Rome, Paris** 等で医者を開業し, まったく当時の国際的な人物であった。さらに言語学者であると同時に外交官でもあり, また社会改革を志す人でもあって, 実に百科辞書的存在だと評せられた。彼はつとに *Salerno* の養生法, (後述参照) を蒐集していたが, また彼自身の老年に関する著述 (1544に英訳せられて *"Famous clarke and ryght experte medycyne"* という) は, 医学とともに彼の化学的知識を窺知しうるものであった。彼は **Galen** に従って年をとるということは, 湿潤体液に対する乾燥体液の増加によるといい, 時に応じて厳正に食事を制限すること, 投薬は時節によること, 健康の保持, 入浴, 野菜や薬用酒による治療処箋, 錬金術的秘薬療法, よろず節制などが入念に説かれているという。あたかもこの著述は, 13世紀における *物知り* 医者²の錬達した忠告, ともしられるべきものであったのであろう。アラビア語で *'Shaikh'*³ という言葉があるが, これは *'old man'* という意味をもつと同時に, 一般的な尊称とせられ, *chief* とか *head* という意味をもつが, 彼こそこの *Shaikh* といわれるべき人物であったといえることができる。後彼の著書は焚書の厄にあい, また教会の手によって投獄せられたこともあったという。

Villanova がスコラ的方法のアラビア注釈者から輩出したのに対して, **Roger Bacon**³ (1214-1292) はキリスト教的僧堂思想から生れた。王朝政治のなかに教会への信仰とスコラ的なギリシャの注釈的学問によって, 次第に拡大伸張しつつあったアラビア文化のうちに, そしてイベリア半島のうえにひろがるヨーロッパの一部において, 人間発達の考想が誕生したのであった。**Villanova** の考想がいわば地中海沿岸の暖色の光芒のなかに育ったとすれば, **Bacon** の思想は北ヨーロッパの冷色淡青の薄明のうちにさかえたといえることができる。そして **Villanova** はスペイン, サレルノ, ギリシャのヨーロッパ南部を, **Bacon** はイギリスを中心として北欧

老年学 (Gerontology) の源流 (I)

を遊説したのであった。彼が当時発達した都市の要求にこたえ得たことは、牧師であり、スコラ的思想家であると同時に、ヒューマニストであり、科学者でもあったからであろう。

彼の 'Retardation of Old Age, the Cure of Old Age, and the Preservation of Youth' (1683年にR.Browneによって、かかる書名で翻訳せられた) に説くところの概要は次のようである。彼は本来的には Galen の思想に従って、agingは伝染病、油断さらに無知によって、われわれ人間の身体内における生来の水分が減少し、異常水分が増加することによって、生来の熱量が失われることにもとづくとしたのであるが、しかし少くとも80才までは生きながらえうと教えた。スコラ的思想におおわれ、教会の非啓蒙主義にくもらされて、彼は aging に関するあらゆる説を検討したのであろうが、aging は生来の遺伝的傾向によるといい、適当な健康保持の計画によってかかる遺伝的傾向を変えることができるともいい、また外部の影響によるといい、さらにまたかかる生死につながる外部の力を調整することの困難によるともいっている。従ってこの著述は抜けめのない、色気の多い不実な考想の集積ともみられ、帰するところは、aging の過程は病気によるという全く病理的なものであると説くギリシャ的な思想に随順するのであろうとおもわれる。*生命を延すことについて、医学的な技術は健康の管理をおいて外にはない、と、アリストテレスと同じように延命長寿の可能性を主張するのであるが、別に奇特な説はないといわれている。けだし新奇は神学的原理からは禁忌されたがために、あえて避けたのであろうとの憶測も可能であろう。なお、彼は *毎日は老年への一步一步であり、この前進は病気によって加速される、といったということが、その後17世紀になって明らかにせられたのであるが(上記の翻訳をいう)、これは前述の老化の過程は病理的なものだとといったところと相通ずるものである。

すでにVillanovaが*Salernoの養生訓、の蒐集に努力したことをのべたのであるが、それは 'Compendium Salernitatum' (Salerno 養生法解説) と称し、また 'Regimen Sanitatis Salernitatum' (Salerno 健康養生法) と称して彼によって公刊せられた。Salerno⁴ はナポリ附近の小さな町の名称で、そこに当時の医療センターとでもいうべき病院や学校があったのである。紀元後何年頃に創設せられたかは不明であるが、その昔はギリシャの医者によっていわゆるヘルスセンターとして発足し、その後その周辺に教育センターが附置せられ、それが学校となり、9世紀の頃まで存続したのではないかといわれる。とにかくこの医療教育センターはローマ人の温泉保養所として出発したのかも知れない。この衛生管理訓の一部はその後 aging の医療方法に適用せられたということである。

この Salerno の医療教育センターの開設とそこにかかけられた養生訓、そしてそれを詩のかたちで公刊した Villanova の業績は、アラビア医学から中世紀末の医学への架橋をはたしたものであり、キリスト教的教会主義とスコラ哲学における注釈主義から蟬脱して、いわゆるより自由なヒューマニズムへ発展する契機をつくったのではないだろうかと考えられる。けだしキリスト教の教会主義は永遠の生命に対する伝道に献身し、スコラ哲学においては Avicenna

老年学 (Gerontology) の源流 (I)

(981—1037) といひ、Averroes (1126—1198) といひ、Maimonides (1135—1204) といひ、彼らはみなAristotelesの注釈、反復にあらざれば、Hippocratesや Galenに忠実であるにすぎなかった。従って当時の医学は定型紋切型のものであり、独断的であり、展望に欠けた空虚なものであると同時に、思想の進歩発展も全く期待することができなかった。勿論老年や老化に関するあたらしい知識は見だされるはずはなかったのである。試みに Arabia の医者として代表的な人物といわれた前記Maimonides⁵の老年養生必携をあげてみよう。彼は老人に対して自分の主治医にしばしば検診してもらうことを勧奨した。そして危急の場合は採血や下剤の服用をすすめ、劇薬の使用を禁じ、すべて中庸の徳をたたえたのである。また老人や心臓病患者に過度の性交の危険を警告することもおこなった。そして彼は、食事のこと、有毒物のこと、また便秘について、痔疾、喘息などの疾病について、さらに一般的な養生訓について一書を物したこともあったのである。

ここでまた想起されることは、わが国徳川時代の養老道⁶とそれにちなむ老人観の問題である。儒学の興隆によって孝道が説かれ、国学の振興によって皇道が伝えられ、心学の勃興によって商道が明らかにせられるとともに、医学の新興によって養生道がひろめられたと考えられる。要するに敬老、養老の観念も、ようやく道学的な観念論より脱却して、社会的に一般化するとともに、幾分たりとも科学的根拠による人間科学的な実証的立場から啓蒙されるにいたったとみることができる。そしてそれが西欧のルネッサンスの前衛的な思想と実践に相通するものを連想させるのである。勿論ルネッサンス以後の老年に関する医学的考察と実践が、わが国の明治以後のそれらに対応するとは、ただちに考えるものではないが、上来の考察からみて、文化史的乃至は歴史的に、わが国における老年観および老年探究の考想となんらかの並行関係があるように考えられることは、きわめて興味深いものがある。

中世の原始医学的老年観にちなんで考察すべきことは、Karl Pearson⁷の丹誠をこめた witchcraft (巫女の知恵または邪芸) に関する考想である。witch (sibyl) または witchcraft については、すでにC.Mackayの迷信に関する著書のなかで、'Witch Mania' (巫女の狂乱) についてのべられているし、またG.L.Kittredgeの興味ある研究によって、巫女は鬼婆 (hag) の伝説によって老女であると断定せられたようである。Pearsonによれば、かかる知恵者ぶった巫女は、先史時代および古代の母権時代の遺物であり、当時の狂乱的な儀式または風習の名残であるとする。すなわち母権時代の老婦人は、種族の法規や家族の風習の主宰者でありまた管理者であり、農耕牧畜に関する儀式をつかさどり、神聖な儀式や舞踏に多くの邪鬼的な不純な行為をおこなったという。勿論巫女には善良な老女もあれば邪悪なものもあり、前者は幸運をもたらし、後者は飢饉悪疫をもたらしものとして、いわば女呪禁師として一般に畏敬せられていたのであって、当時いわゆるキリスト教的鬼神学 (Christian demonology) というようなものまで形成したということである。これと同工異曲のものとして、わが国で考察されるのは、能楽殊にその前身たる平安時代の猿楽において重視せられた山姥⁸の表象である。これに関

老年学 (Gerontology) の源流 (I)

して折口氏の考察を要約すれば次のようである。すなわちそれは山の神の巫女として、最初は神を抱き守りする役で、後にその神の妻ともなる（前述の Pearson の記述では priestess は goddess ともなるとあるのと同工である）。その巫女の年高く生きているのが多い事実から、
「うば、を老年の女と観ずるようになったらしい。また「うば、をただの老嫗の義に考えたのも古くからのことであるが、やはり「神さびた生活、をする女性の意である。……鎮魂の儀場の場にこの山姥がでてくる……云々。かかる考察からみて、姥が鎮魂の神事、鎮魔除魔的な祈禱に出現し参加することは、既述の常世人の場合と同じであり、老巫女としての性格は呪性をおびたものと考えて差支えないと思う。ただわが国においても伝説にあらわれたところでは、姥を鬼婆と表象しているのであるが、上述のように西洋中世はとにかく、わが国においてかく表象される所以はいかなる点にあるか。これは黄泉の醜女の表象転化ではなからうかと考えられる。けだし一面常世は常闇に通ずるところから、闇かきくらす恐ろしい暗黒の黄泉国とも解釈した本居宣長の説によって、黄泉の鬼神またはそれにつかえる妖巫女が、いわゆる山姥または姥の表象を生み出したのではないだろうか、いささか浅学の牽強附会もなくはないが、一応かく連想するのである。

却説西欧中世は周知のごとく、キリスト教と回教との抗争、そして十字軍の聖地回復企図の混乱のなかに、民衆の無知と頑迷、社会の迷信と無秩序の時代であり、霧深きギリシャ、ローマの偉大な指導者に対する仰慕のなかに、戦士の仮面と牧師の頭巾を被った偉人を見ることができたのであろう。ただアラビアの科学者や哲学者のみが、錦繡のターバンを巻き、知性と耐忍のかがやきをもって、辛うじて過去の学問文化をヨーロッパに伝えたのであった。

注

- (1) J.T. Freeman, Medical Perspectives in Aging, The Gerontologist, Vol.5, No.1, Part II, 1965, p.9
- (2) A.H.Lawton, The Historical Developments in the Biological Aspects of Aging and the Aged, The Gerontologist, Vol.5, No.1, Part II, 1965, p.25
- (3) J.T. Freeman, op.cit. pp.10-11
- (4) 〃 op.cit. p.8
- (5) 〃 op.cit. p.6
- (6) 拙著 老年期研究 同上 p.88
- (7) S. Hall, Senescence, 1922, pp.72-74
- (8) 拙著 老年期研究 同上 p.76